

クリスタリン表現に対応する (φ, Γ) -加群について

渡部匠

東京大学大学院数理科学研究科修士2年

修士論文の要旨

p 進ガロア表現と $\tilde{\mathbb{A}}_K$ 上の (φ, Γ) -加群の圏同値において、 p 進ガロア表現の特別なクラスであるクリスタリン表現に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K$ 上の (φ, Γ) -加群を特徴づけた。

この研究は数論に属する。数論とは整数 \mathbb{Z} の性質を調べる分野。整数を調べる上では、実数体 \mathbb{R} や p 進数体 \mathbb{Q}_p について考えると良い。

p 進数とは

p を素数 $2, 3, 5, 7, 11, \dots$ のどれかとする。このとき p 進整数環 \mathbb{Z}_p とは

$$a_0 + a_1p + a_2p^2 + a_3p^3 + \dots \quad (a_i \text{ は整数})$$

の形で書けるもののこと。 \mathbb{Q}_p はその商体。

\mathbb{Q}_p は有理数全体 \mathbb{Q} を含むことに注意。本研究は $(\mathbb{R}$ ではなく) \mathbb{Q}_p に関するもの。

定義

K を p 進体(例えば \mathbb{Q}_p やその有限次拡大), G_K をその絶対ガロア群とする。

G_K の p 進ガロア表現とは、有限次元 \mathbb{Q}_p -線型空間 V と V への連続な G_K の作用の組のこと。

G_K の自由 \mathbb{Z}_p -表現とは、有限生成自由 \mathbb{Z}_p -加群 T と T への連続な G_K の作用の組のこと。

p 進ガロア表現や自由 \mathbb{Z}_p -表現に対する主要な理論として、J.-M. Fontaineによる (φ, Γ) -加群の理論がある。以下、自由 \mathbb{Z}_p -表現について述べる。

Notation

K を p 進体, k をその剰余体とする。 $K_0 := W(k)[1/p]$ とする。 \bar{K} を K の代数閉包とし、その完備化を \mathbb{C}_p とする。 $K_\infty := \bigcup_{n=1}^{\infty} K(\zeta_{p^n})$ を K の p -円分拡大とする。 $G_K := \text{Gal}(\bar{K}/K)$, $H_K := \text{Gal}(\bar{K}/K_\infty)$, $\Gamma_K := \text{Gal}(K_\infty/K)$ とおく。 K_∞ の完備化の整数環を $\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}$ とし、そのtiltを

$$\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b := \varprojlim_{x \rightarrow x^p} \mathcal{O}_{\bar{K}_\infty} / p\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}$$

とおき、 \widehat{K}_∞^b をその商体とする。 $\mathcal{O}_{\mathbb{C}_p}, \mathcal{O}_{\mathbb{C}_p}^b, \mathbb{C}_p^b$ も同様に定める。

$$\tilde{\mathbb{A}}_K := W(\widehat{K}_\infty^b), \quad \tilde{\mathbb{A}}_K^+ := W(\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b), \quad A_{\text{inf}} := W(\mathcal{O}_{\mathbb{C}_p}^b)$$

とおく。更に $\epsilon := (1, \zeta_p, \zeta_{p^2}, \dots) \in \mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b$, $\mu := [\epsilon] - 1 \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+$,

$\xi := \mu/\varphi^{-1}(\mu) \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+$ とおく。

Fontaineはフロベニウス写像と G_K の作用で安定な部分環 $\mathbb{A}_K \subseteq W(\mathbb{C}_p^b)$ を構成した。 \mathbb{A}_K への H_K の作用は自明なので、特に Γ_K が作用している。 K が絶対不変分岐、つまり $K = K_0$ の場合は $\mathbb{A}_K = W(k)((\mu))_p^\wedge$ となる。

定義

\mathbb{A}_K 上の (φ, Γ) -加群とは

- 有限生成自由 \mathbb{A}_K -加群 M
- M への連続かつ半線型な Γ_K の作用
- \mathbb{A}_K -線型同型写像

$$\Phi_M: M \otimes_{\mathbb{A}_K, \varphi} \mathbb{A}_K \cong M$$

であって、 Γ_K の作用と整合的なもの組のこと。

G_K の作用に比べて $\Gamma_K \hookrightarrow \mathbb{Z}_p^\times$ の作用は遥かに簡単なため、 \mathbb{A}_K 上の (φ, Γ) -加群は G_K の自由 \mathbb{Z}_p -表現よりも遥かに単純なものである。しかし、これらの圏が圏同値になるというのがFontaineの定理である。

定理 [Fon90, Théorème 3.4.3.]

$$\begin{array}{ccc} \mathbb{A}_K \text{ 上の } (\varphi, \Gamma)\text{-加群} & \xrightarrow{\text{圏同値}} & G_K \text{ の自由 } \mathbb{Z}_p\text{-表現} \\ \cup & & \cup \\ M & \xrightarrow{\quad} & (M \otimes_{\mathbb{A}_K} W(\mathbb{C}_p^b))^{\varphi=1} \\ & & \downarrow \\ & & (T \otimes_{\mathbb{Z}_p} W(\mathbb{C}_p^b))^{H_K} \longleftarrow T \end{array}$$

p 進ガロア表現の中でも数論で重要となるクラスがいくつかある。そのうちクリスタリン表現について考える

修士論文で扱う問題

クリスタリン表現に対応する (φ, Γ) -加群とはなにか？

この問題はFontaine, Wach, Colmezの研究をもとに、 K が絶対不変分岐の場合はBerger([Ber04])が定めたWach加群によってひとつの答えが出た。

$\tilde{\mathbb{A}}_K^+ := W(k)[[\mu]] \subseteq \mathbb{A}_K$ とおく。このときWach加群とは、

- 有限生成自由 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -加群 N
- N への連続かつ半線型な Γ_K の作用であって、 N/μ で自明となるもの
- $\tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)]$ -線型同型写像

$$\Phi_N: N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi} \tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)] \cong N[1/\varphi(\xi)]$$

であって、 Γ_K の作用と整合的なもの

の組のことである。BergerはこのWach加群がなす圏と G_K の自由クリスタリン \mathbb{Z}_p -表現のなす圏が圏同値であることを示した。 N をWach加群とし対応する自由 \mathbb{Z}_p -表現を T とおくと、 T に対応する \mathbb{A}_K 上の (φ, Γ) -加群は $N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} \mathbb{A}_K$ で与えられる。つまりBergerは、クリスタリン表現に対応する (φ, Γ) -加群を、特別な条件を満たす $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -格子の存在によって特徴付けた。

→ K が絶対不変分岐という条件は強いので、一般の p 進体に拡張したい。

問題点

K が分岐している場合は、 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ の構成が知られていない。

そこで \mathbb{A}_K 上の (φ, Γ) -加群ではなく、 $\tilde{\mathbb{A}}_K := W(\widehat{K}_\infty^b)$ 上の (φ, Γ) -加群を用いる。この場合 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ の代わりに $\tilde{\mathcal{O}}_{\bar{K}_\infty}^b := W(\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b)$ が使える。修士論文の結果を述べる。

定義

- $q_\infty := \{[a]x \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+ \mid a \in \mathfrak{m}_{\bar{K}_\infty}^b, x \in \tilde{\mathbb{A}}_K^+\}$ 。但し $\mathfrak{m}_{\bar{K}_\infty}^b$ は $\mathcal{O}_{\bar{K}_\infty}^b$ の極大イデアル。
- p -捩れ元を持たない $W(k)$ -加群 M , 半線型準同型写像 $\varphi: M \rightarrow M[1/p]$ に対し、 $M_{\varphi\text{-fin}} := \{x \in M \mid \dim_{K_0} \langle \varphi^n(x) \rangle : n \in \mathbb{Z}_{\geq 0} \rangle_{K_0} < \infty\}$ と定める。

定義

$\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上のクリスタリン (φ, Γ) -加群とは

- 有限生成自由 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -加群 N
- N への連続かつ半線型な Γ_K の作用
- $\tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)]$ -線型同型写像

$$\Phi_N: N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi} \tilde{\mathbb{A}}_K^+[1/\varphi(\xi)] \cong N[1/\varphi(\xi)]$$

であって、 Γ_K の作用と整合的なもの組であって、次の条件を満たすものこと。

- $(N/\mu)^{\Gamma_K}$ は有限生成射影 $(\tilde{\mathbb{A}}_K^+/\mu)^{\Gamma_K}$ -加群であって、自然な写像

$$(N/\mu)^{\Gamma_K} \otimes_{(\tilde{\mathbb{A}}_K^+/\mu)^{\Gamma_K}} \tilde{\mathbb{A}}_K^+/\mu \rightarrow N/\mu$$

は同型。

- $(N/q_\infty)^{\Gamma_K}_{\varphi\text{-fin}}$ は有限生成自由 $W(k)$ -加群であって、自然な写像

$$(N/q_\infty)^{\Gamma_K}_{\varphi\text{-fin}} \otimes_{W(k)} \tilde{\mathbb{A}}_K^+/q_\infty \rightarrow N/q_\infty$$

は同型。

主定理

$$\begin{array}{ccc} \tilde{\mathbb{A}}_K^+ \text{ 上のクリスタリン } (\varphi, \Gamma)\text{-加群} & \xrightarrow{\text{圏同値}} & G_K \text{ の自由クリスタリン } \mathbb{Z}_p\text{-表現} \\ \cup & & \cup \\ N & \xrightarrow{\quad} & (N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} W(\mathbb{C}_p^b))^{\varphi=1} \end{array}$$

Wach加群と同様に、 $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上のクリスタリン (φ, Γ) -加群 N と対応する G_K の自由クリスタリン \mathbb{Z}_p -表現 T に対して、 $N \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} \tilde{\mathbb{A}}_K^+$ は T に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上の (φ, Γ) -加群となる。つまりクリスタリン表現に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上の (φ, Γ) -加群を、特別な条件を満たす $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ -格子の存在によって特徴付けた。

証明には[BS23]の結果である。 G_K の自由クリスタリン \mathbb{Z}_p -表現のなす圏と \mathcal{O}_K 上の絶対プリズマティック F -クリスタルのなす圏の圏同値を用いる。具体的には、 \mathcal{O}_K 上の絶対プリズマティック F -クリスタル \mathcal{N}_Δ に対し、 $\mathcal{N}_\Delta(\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi(\xi))$ が $\tilde{\mathbb{A}}_K^+$ 上のクリスタリン (φ, Γ) -加群であることを示し、擬逆関手を構成した。

$$\begin{array}{ccc} \text{Mod}_{\varphi, \Gamma}^{\text{ét}}(\tilde{\mathbb{A}}_K^+) & \xrightarrow[\cong]{\text{[Fon90]}} & \text{Rep}_{\mathbb{Z}_p}(G_K) \\ \uparrow \otimes_{\tilde{\mathbb{A}}_K^+} \tilde{\mathbb{A}}_K^+ & \circlearrowleft & \uparrow \\ \text{Mod}_{\varphi, \Gamma}^{\text{th, crys}}(\tilde{\mathbb{A}}_K^+) & \xrightarrow{\text{主定理}} & \text{Rep}_{\mathbb{Z}_p}^{\text{crys}}(G_K) \\ \downarrow \text{evaluate at } (\tilde{\mathbb{A}}_K^+, \varphi(\xi)) & \circlearrowleft & \downarrow \text{[BS23]} \\ & \text{Vect}^\varphi(\mathcal{O}_{K, \Delta}, \mathcal{O}_\Delta) & \end{array}$$

今後の展望

- semi-stable表現やde Rham表現に対応する $\tilde{\mathbb{A}}_K$ 上の (φ, Γ) -加群の特徴付け
- 主定理を他の問題へ応用

参考文献

- Laurent Berger, *Limites de représentations cristallines*, Compos. Math. **140** (2004), no. 6, 1473–1498. MR 2098398
- Bhargav Bhatt and Peter Scholze, *Prismatic F -crystals and crystalline Galois representations*, Camb. J. Math. **11** (2023), no. 2, 507–562. MR 4600546
- Jean-Marc Fontaine, *Représentations p -adiques des corps locaux. I*, The Grothendieck Festschrift, Vol. II, Progr. Math., vol. 87, Birkhäuser Boston, Boston, MA, 1990, pp. 249–309. MR 1106901